

医療最前線

県立中央病院から
〈167〉

狭心症は、心臓に栄養を送る冠動脈が動脈硬化などで狭くなることにより、活動時に血流が不足して胸に圧迫感や痛みを生じる病気。県立中央病院循環器内科の清水琢也医師によると、狭心症に対しては生活習慣の改善、内服での

は、冠動脈造影検査で冠動脈が狭くなっていたり、ふさがっていたりといった病変を確かし、その病変によって心筋への血流が低下しているか評価した上でを行っている。

かつては造影検査で冠動脈の狭窄を認めれば、バルーンやステント（金属製の網状

のチューブ）で血管を広げる治療をするのが主流だったが、再狭窄などの弊害を伴うことが世界的に知られるようになり、現在では「冠動脈狭窄による血流低下が確認された場合にのみ、カテーテル治療やバイパス手術をするのがスタンダードになっている」

るため、治療が必要かどうかの判断がより正確にできる。県立中央病院では昨年12月、最新の冠動脈内圧測定検査機器を導入。従来型は検査前に薬剤を投与し心臓に負荷をかける必要があったが、新型は薬剤による負荷を行わずに済み、患者の負担が軽減できるとい

狭心症に冠動脈内圧測定検査

血管内治療回避で負担減

（清水医師）。

血流低下を確認する方法として、運動負荷試験や、放射線を使用する心筋シンチ（心臓核医学）検査などがあるが、これらは複数の病変がある場合の評価に限界があった。そこで近年注目されているのが、冠動脈内圧測定検査。手首や脚の付け根からカテーテルを通して、冠動脈にプレッシャーワイヤと呼ばれる圧測定用ガイドワイヤを挿入、病変の前後で圧測定を行う。複数

入による冠動脈損傷のリスクなどはあるが、必要のない手術やカテーテル治療を避けるために重要な検査だという。心疾患の主な要因となる動脈硬化は、脂質異常や糖尿病、高血圧、肥満などの生活習慣

病が基。「まず病気になるために食生活を見直し、禁煙、適度な運動を心がけて」

と清水医師。「なってしまったら再発しないよう2次予防を忘れないでほしい」と呼び掛ける。Ⅱ第2、4木曜日に掲載します

治療が基本だが、重症化するとカテーテル治療（血管内治療）や、血管の詰まった部分を飛び越えて新しい血液の通り道をつくるバイパス手術が必要となる。

カテーテル治療やバイパス手術が必要かどうかの判断

清水琢也医師

冠動脈内圧測定の仕組み

